

2月のおはなし

「かくれおに」

マ

モルは団地の廊下を走っていた。鬼には絶対に見つからない自信があった。三日前、偶然見つけたとっておきの場所、B棟五階の突き当たりのパイプスペースだ。

その入り口の扉は壊れていて二、三十センチしか開かない。大人は入れないが、○は体を横滑りさせれば、その隙間から入ることができた。扉の向こうは無数の配管が上下左右に行き交う格好の隠れ場所だった。

1

一番太いパイプの影に隠れて磨りガラスが入った扉を窺う。鬼のヨシオが来ればすぐに分かる筈だった。

2

十分が経ち二十分が経った。ヨシオは来なかった。次第に緊張感と高揚感はどこかに行ってしまう、退屈だけがやってきた。モルはパイプにもたれて、ついうとうとと、眠ってしまった。

目が覚めると辺りは薄暗く、既に日は相当傾いているようだった。どれだけ眠っていたのだろう。

も

う家に帰らなくては、立ち上がった時、扉の向こうに人の気配がした。反射的に身を潜める。

でもヨシオではなかった。擦りガラスに映った人影は、遥かに巨大だった。ノブがゆっくりと回り、ぎい、と扉が開いた。



しかし、やはり二十センチ開いて、がたとと止まる。

その隙間から廊下の蛍光灯に照らされて、手が見えた。その手は赤く筋ばつて毛むくじやらで、爪は鋭く尖っていた。

何度も乱暴に扉を開けようとして、扉が音をたてる。その度、マモルは身を竦ませたが、ありがたいことに、扉はどうやっても、それ以上開かなかった。扉の向こうから苛立ったような荒い息使いが聞こえた。やがて、そいつがドアの隙間に顔を押し付けて、こちらを覗き始めた。

**黄**

色い燃えるような目がぐるりと中を見渡し、ぴたりと目があった。

あらゆるものを焼き尽くすよ

うなその眼差し。マモルは体中に火が付いたような気がして叫んだ。

**目**

が覚めた。懐中電灯に照らされていた。

「ああ、いたぞ。ここだここだ。よかった」

辺りに知らせる大人の声。

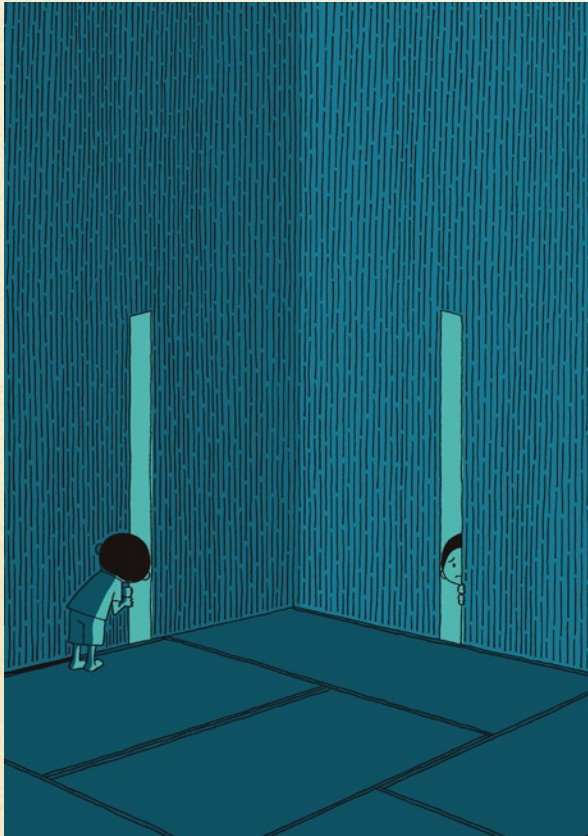
僕はここで眠ってしまっただけで随分みんなに探させてしまったのだろうか。さっきの黄色い目

は夢？

「すぐお父さんくるからな」

優しく声をかけてくれるその人の、その目とその腕。





そ

してマモルは、僕は本当  
に目が覚めたのだろうか、  
か、と思った。

5

## 妄想の地平線

2月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁  
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU